名誉会員　上田隆三先生の逝去を悼む

日本表面科学会理事
難　波　義　捷

先生は昭和59年8月1日心筋こうそくのため，ご家族の手厚い看護にもかかわらず，東京慈恵会医科大学附属病院にて66歳の尊い生涯を閉じられました。

今日は，つい先日電話で話された先生のあのお元気なお声を最後に，長年にわたる数々の想いをこめて追悼の言葉を述べねばならぬ運命になってしまいました。この驚きと無念さはまことに言いつくせないものがあります。

想えば，先生は薄膜，表面の研究分野に生涯をかけて身を投ぜられ，その間，ひるまずたゆまず，これを持って天職とした，まれに見る高潔，豪放な方でありました。

先生は昭和17年に早稲田大学理工学部応用化学科を首席で御卒業になり，その後昭和29年に応用物理学会庶務理事，39年応用物理学会誌編集委員長，同 JJAP 編集委員長，47年応用物理学会薄膜表面物理分科会幹事長，54年日本表面科学会会長等を歴任し，学会関係の重責を果たされ，また海外に於いては，昭和32年より英国ケンブリッヂ大学キャベンディシュ研究所，米国ブルックヘブン国立研究所，カリホルニヤ工科大学ジェット推進研究所等の客員研究員，カリホルニヤ工科大学客員教授等，国外に於ける貴重な経験と大役を果たされて参りました。

とくに国内では，昭和47年に応用物理学会の中に薄膜・表面物理分科会を創設され，初代幹事長としてその第一線で活躍され，この分野の研究の基礎を築かれましたその偉業は，学会，業会の方々より高く評価されております。

また，50年には私達の苦しい研究費の援助とレベルの向上を目指し，表面エレクトロニクスと題する特定研究を初めてこの分野に組織されたことはまだ記憶に新しいことでございます。

さらに，先生は物理，化学，生物等，それぞれの研究の核心は，そのほとんど全てが表面，界面の構造，組成，原子的及び電子的状態の問題に帰するということを日ごろから口ぐせのように言われ，このため，表面科学に関連する方々の集りを作るべく多大の努力を払われてこられました。その結果，関係者の絶大なる賛同を得て，昭和54年9月13日，ついに「日本表面科学会」設立の運びとなり，先生はその初代会長として学会発展のため限りなく力を尽されました。先生のこのような学問に対する執着心と実現に向けての先見性，企画力，及びその行動力は表面科学発展の歴史に於いて特記されるべきものでしょう。

先生は，さらに海外に向けても国際的発展を計るべく，昭和49年には内外から一流の研究者を一堂に集めて国際的会合を行ない，53年には固体薄膜と表面に関する第1回の国際会議を計画してこれを東京で開催し，さらに，57年には先端技術の基礎となるMBEの国際会議を計画されるなど，寝食を忘れ会の発展にご尽力されましたことは，数えれば枚挙にいとまない程であります。

中でも53年に，日本で初めて組織された固体薄膜と表面に関する国際会議は，第2回がワシントンで行なわれ，第3回目はこの8月27日からオーストラリヤで開催が予定されておりました。いま，先生はこの国際会議を目前にして66歳の尊い生涯を閉じてしまわれました。私達は何といって悲しんだらよいのでしょうか。ただ霊前に頭をたれるばかりでございます。

顧みて，私達はこのような先生に対して何を報いることがあったでしょうか。先生のお姿は此の世から消え去られましても，先生が手掛けられた応用物理学会の薄膜・表面物理分科会，日本表面科学会，固体薄膜と表面に関する国際会議等，数々の偉業は消え去ることなく生き続けると信じるものでございます。

先生には案ずることなく，安らかにお眠り下さらんことを，お祈り致しましてお別れの言葉に代えさせていただきたく存じます。

当日，葬儀は多数の参列者のもとに粛かにとり行われ，本学会からは島岡五朗理事が弔辞を代読致しました。